

第208回aacaフォーラム 「パブリックアートの今」

2025年3月21日（金）

16：30～

サンゲツ PARCs

German Suplex Airlinesさん

風間 天心さん

前田 真治さん

菅 隆紀さん

山崎 和子さん

現代の日本は、かつてに比べてデザイン性や質の面で優れた空間が増え、一見すると豊かな文化や環境を享受できるように思えます。しかし、その多くは対価を支払うか、自ら積極的に行動しなければ手にすることができません。コロナ禍を経て「第三の居場所」が注目を集めました。第一の場所（家庭）と第二の場所（職場・学校）の両方から疎外された人々が、身を寄せる場を失いつつあることが、現代社会の大きな課題とされています。また、図書館をはじめとする公共施設でもアウトソーシング化が進み、本来は誰もが自由に利用できるべき公共空間でさえ、経済合理性の名のもとに営利的な価値観にさらされています。有償のスペースが増え続ける中で、無償で快適に過ごせる「みんなの居場所」としてのパブリックスペースの意義が、今、改めて見直され、その重要性を増しています。

1930年代にアメリカなどで、経済恐慌による苦境に陥った芸術家やアーティストを支援する公共政策として始まったパブリックアート。1950年代にフランスでは、公共建築の予算の1%を美術作品の設置や購入に充てることを義務付ける法律が成立。1970年代に日本にパブリックアートの概念が導入され、地域再開発を目的として公共空間に彫刻作品が設置されるようになり、1990年代半ばに日本各地の街づくりに国際的なアーティストの彫刻などが設置され、広く知られるようになったパブリックアートという概念。

今日的な意味での「パブリックスペース」の見直しが必要な今、「パブリックアートの今」を共通テーマとして3組の先鋭的なアーティストにご登壇いただき、各々の活動をご紹介いただきながら自らの想いを語っていただきます。講演後には、3組の登壇者による鼎談と意見交換の場を設け、「現代におけるパブリックスペースの意味・パブリックアートの意義」について、参加者の様々な気づきに繋がるような新たな視座の発見を試みます。

第208回 aacaフォーラム

「パブリックアートの今」

「登壇者」 ①German Suplex Airlines (前田真治さん、風間 天心さん)
②菅 隆紀さん
③山崎和子さん (aaca理事)
モデレーター: 萩尾 昌則 (aacaフォーラム委員会)

「会場」 株式会社サンゲツ PARCs Sangetsu Group Creative Hub
東京都千代田区内幸町2-1-6 日比谷パークフロント12F
[サンゲツ PARCs Sangetsu Group Creative Hub プレスリリース](#)

「日時」 2025年3月21日(日) 受付開始16:00 フォーラム16:30~18:30
【第2部】懇親会 18:30~19:30

「定員」 40名(定員になり次第締め切ります。)(ネット配信は行いません。)

「会費」 aaca会員2,000円 一般3,000円 (懇親会に参加される方は左記金額+1,000円)
※当日会費の受付は行いませんので下記銀行口座にお振込みください。
三井住友銀行 三田通支店 普通8089627
一般社団法人 日本建築美術工芸協会 シンポジウム
※キャンセルの場合、参加費の返金ができませんのでご了承ください。

「申込」 参加ご希望の方は下記URLから 3月16日(日)までに申込手続を行ってください。
右記QRコード読取でも申込用Webページにアクセスできます。
<https://ws.formzu.net/dist/S861623642/>

「問合せ」 フォーラム委員会 koho@aacajp.com



German Suplex Airlines (前田 真治さん・風間 天心さん)

German Suplex Airlinesは、6人の作家が集い、独自の表現を社会にどのように浸透させていくかを考え、様々な分野のプロフェッショナルたちと協同しながら、プロジェクトとして実行することを活動の柱にしています。ジャーマンスープレックスとは、人の天地を逆さまにして床に叩きつけるプロレス技。German Suplex Airlinesは、天地がひっくり返るような概念の転換を生み出せはしないかと考えて活動しています。Airlinesには、ひっくり返ったものを上昇させるイメージを与えるなどが含意されています。



菅 隆紀 (すが・たかのり)

ストリートアートを出発点に持つ菅さんにとって、中央と辺境、あるいは表と裏、といった両極に位置する概念が重要なキーワード。ステッカーの剥がし跡、ぶちまけられた液体、路上で収集されるモチーフ、オーストラリア放浪時に道で見つけた牛骨、朽ちた空き家などの様々な形態を規格外のキャンバスとして採用するなどの実践により、表と裏という相反する二つの概念を攪拌。また、異なる場所で描く行為を通して共鳴しあうインスタレーション作品からは、共時性を環境に当てはめることで、希薄化した社会との接点を探り出そうとしています。



山崎 和子 (やまざき・かずこ)

日本伝統の友禅染をベースにパネル絵を制作しており、近年では「時・空間」をシャープなストライプとグラデーションによるパターンを平面の中に創り出した構図の変化で生まれてくる錯覚の異次元の動の世界を表現しています。キャリアのスタート分野はインスタレーションでしたが、多摩美術大学絵画油彩専攻を卒業後はテキスタイルのデザイナーから染色分野に活動領域を変更し創作を開始。その活動が国内外から注目され、近年では海外でも高い評価を得ています。

